

「消化管出血と緊急内視鏡検査」

〔編集〕竹本忠良・鈴木 茂

京府医大教授

川 井 啓 市

プラハ（チェコスロバキア）で Urgent Endoscopy に関する国際シンポジウムが開かれたのは 1970 年（昭和 45 年）である。その後、本シンポジウムの Proceeding が「Urgent Endoscopy of Digestive and Abdominal Diseases」として出版され、竹本教授が雑誌「胃と腸」に紹介されたのは、まだ記憶に新しい。多分この頃から、竹本教授にはこのような「消化管出血と緊急内視鏡検査」を予定されていたのではないと思われる。

外国の医学に関する学会やシンポジウムに出席して感じるのは、まず欲しいのは共通の言語である。ここでの言語とは単に英語とか日本語といった意味のみではない。このような問題は同時通訳という技術である程度はカバーできるが、むしろ重要なことは疾患に関する共通の関心である。少なくとも共通の定義にたつての理解がなければ問題点の討議はできないし、国際会議は各国の学者の集まりに過ぎなくなる。そんなことは当然だと考える人は多いかも知れないが、たとえば日本にいても、

赤痢やマラリヤなどに関する優秀な講演を聞き、かつ討論できる background が十分にあるのかを考えてみたいものである。

その意味では、このプラハにおける国際シンポジウムは意義深かったと思う。

思い起こせば私達が「消化管出血に対する内視鏡検査」の意義を初めて発表したのが 1964 年（昭和 39 年）であり、1968 年（昭和 43 年）に私が西独に滞在した当時はヨーロッパでは次第にファイバースコープが普及し始めた頃で、殆ど緊急内視鏡検査に関心がなかったのが、1970 年の国際会議では世界の各施設がほぼ同数の経験例をもつに至っていたのである。それだけに皆の共通の関心が強かったのであろう。その後は諸外国では消化管出血の例数が多いこと、また専門医に送る医療システムの差からか、彼我の経験例の差は広がるばかりといった現在だけに、本書の出版の意義は大きいと思う。

このような消化管出血の患者について緊急検査を行なうことは、早急のかつ正確な診断がその予後を決定

するというメリットとともに、このような緊急例を通じて各種の疾患の概念も一層明らかにされてきたことも見逃すことはできない。すなわち急性消化性潰瘍の概念を診断の場にとらえるようにもなったし、Mallory Weiss 症候群を含め病態が明らかにされたものは多いからである。

今まで、単に消化器疾患のみならず、臨床の研究は主に慢性疾患を中心として大学でとりあげられてきたが、将来はこのような急性疾患へのアプローチの鍵を握るのは大学病院の医師ではなく、むしろ第一線の開業医、実地臨床医家であることを評価すべきだと思う。

いずれにしる本書が一貫した編集方針をとりえたのは東京女子医大という同門の連携による故であろうが、消化器専門医・研修医のみならず、第一線で活躍してられる実地医家に御一読をおすすめしたいし、その中から将来の消化器病学の指導者が育ってゆくことを期待するものである。

（B5・頁206 ¥13,000 医学書院刊）